

# 1976年の韓国による教科書是正要求内容に関する一考察

## —「日本社会科教科書検討意見書」の内容検討—

勝間田 秀 紀

### はじめに

社会科教科書の記述内容をめぐって、これまで韓国からは日本の社会科教科書の「わい曲」記述内容に対して是正要求が幾度か行なわれてきた。一番記憶に新しいところでは、扶桑社から出版された『新しい歴史教科書』が国際的な問題となった例がある。また、国際的な問題としての教科書問題として、「侵略」を「進出」に書き換えさせたなどの報道が内外の関心を引き起こした1982年の教科書問題は特に影響力の強い問題として現在でもしばしば話題に出されるものである。旗田巍が「教科書問題を通じて、かつて日本が行なった侵略戦争や植民地支配が、その下で苦しめられた中国・朝鮮その他のアジア諸民族にとって、どういうものであったかということを、日本人は思い知らされた。これほどはっきりと思い知らされたのは、これが初めてではないかと思う<sup>(1)</sup>」と述べているように、「82年教科書問題」は日本人のアジア認識に対する一つの重要な画期として位置づけられるであろう。韓国からの教科書是正要求というと、たいていこの82年教科書問題が初期のそして最大のものとして挙げられることが多い。

これまで韓国からの是正要求は、要求をきっかけに両国の歴史学者が教科書の内容について意見を述べ合う機会は多々あったものの、両国の歴史的な経緯もあり、日本側が真摯にその批判を受け入れようという姿勢が強く、その要求内容そのものが当該教科書の記述と照合して妥当なものであるかという検証が不十分である傾向が大きかったように思う。それは82年教科書問題以前に行なわれた日本の教科書記述に対する韓国からの是正要求についても同様である。その一つの例として本論文では1976年に行なわれた大韓教育聯合会からの教科書是正要求を挙げたい。この是正要求は韓国からの教科書記述は正要求としては確認できる中で初めてのもので、歴史に関する要求を見ても82年教科書問題において韓国から出された36項目の是正要求、あるいは『新しい歴史教科書』に対して出された批判と同内容のものも見ることができるなど、その後の韓国からの要求の原型として位置づけられる要素もある。ところがこの1976年の是正要求に関しては教科書問題を扱った多くの著書の中でほとんど紹介されておらず、要求内容の分析もほとんど表立ってなされていない（後で述べるようにこの要求は政府内部や教科書会社・執筆者に対して送付されているため、彼らが記述改訂などで教科書に反映させてきた可能性は指摘できる）。

日韓での歴史共同研究が進展し、つい最近では韓国との共通歴史教材が発行されるなど、日本と韓

国で教科書・歴史教育に関する新たな動きが見られる中、日本に対しなされた初の韓国からの教科書是正要求の内容を検討することは、日韓での教科書問題を再考し、論議を深めていく上で必要であると考ええる。

本論文では、以上のような問題意識のもと、この是正要求のうち歴史的分野に関する要求について、その内容を検討し、日本の教科書記述に対する韓国側の主張・認識を分析することを通して、その特徴と問題点を明らかにすることを目的とする。

## 1. 是正要求の背景とその波紋

先に述べたように1976年に出された韓国による教科書是正要求は、韓国からの教科書記述是正要求としては在日朝鮮人による教科書批判を除きおそらく初めてであると思われる。この要求は日本教科書協会が韓国の教員組織である大韓教育联合会<sup>(2)</sup>の招待を受け76年8月に訪韓した際に同会から提示され、教科書協会の姉妹団体である教科書研究センターを通じて教科書会社15社に配布されたもので、小中高の社会科教科書198冊を検討し、各教科書会社に対し是正要望を述べている。その内容は『日本社会科教科書検討意見書<sup>(3)</sup>（以下「検討意見書」とする）』にまとめられているが、具体的には「全体的に見て、韓国関係の資料が古いか、事実と異なるものがある、正しい韓国観を損なうおそれがある」というものであり、大半が地理・公民に関する是正要求という韓国による批判としては珍しいものである。

本論文では、これ以降の韓国による是正要求やそれによって問題となった教科書記述内容がほぼ歴史分野に集中している点から、歴史分野に関する是正要求の分析を中心とする<sup>(4)</sup>。

地理・公民分野に関する要求は、南北の対立をふまえたイデオロギー的要素の強い要求を多少含むものの、具体的な資料を掲げ、教科書にある資料の正確性や地名の変更などが詳細に分析・指摘されている。このような要求が出された背景には当時の韓国の経済状況がある。当時の韓国は朴正熙大統領が73年1月に発表した「重化学工業化開発政策宣言」のもと、鉄鋼、化学、機械、造船などの重点開発による重化学工業化が進められており、77年には輸出額100億ドルを達成するなど「漢江の奇跡」と呼ばれる経済成長が進んだ時期であった。当時の統計でも62年から79年までの経済成長率は年平均約10%と非常に高く、経済における農業部門の比率が10%近く減少し工業部門の比率は50%を超えるまでに拡大する<sup>(5)</sup>など、まさに重化学工業化が進んでいることがよくわかる。このような急激な韓国の変化を見れば、いまだ「南朝鮮の産業は農業が中心になっているのに対し、北朝鮮では工業がさかんである」と記述している日本の韓国関係記述に変更を求める動きが出るのも当然であろう。これに対して歴史分野に関する要求を見てみると、「京城の地名に関するもの」、「豊臣秀吉の壬申倭乱に関するもの」、「雲楊号事件に関するもの」の3点のみが挙げられるのみで、それ以降の韓国による是正要求と比較しても歴史に関する要求が少ない点が特徴的である<sup>(6)</sup>。また批判の形態も、地理や公民への要求が該当記述、希望是正内容とその根拠などとともに具体的教科書名と該当頁数を明示しているのに対し、歴史に対する要求では該当教科書欄に「ほとんどの教科書」とあるだけで具体

的な教科書名や頁は全く記述されていない。このような点からみても歴史に関する要求は地理・公民の要求に対する数合わせで出された性格が強いといえる。

この是正要求に対する日本の関係団体の反応は、概ね要求を受容することには否定的である。文部省はこの是正要求に対して「日本の教科書は基本的には筆者の創意工夫で書かれている」という回答を韓国側に送っている。当時の文部省初等中等教育局村上智検定課長は「意見の中で、資料が古いなど妥当なものについては、教科書会社に伝えるなどしたほか、韓国側に対しては、日本の場合、教科書であっても基本的には執筆者の創意工夫で書かれている点を説明した。…こうした意見書が出たからといって、日本の教科書の検定がゆがめられることは絶対ない<sup>(7)</sup>」と述べている。

また、出版労連は韓国教育団体からの批判に対して、「出版社での誤った自己規制につながったり、教科書検定の際に同意見書に即した条件指示などが行われる可能性もある」として、翼下の組合にこの是正要求に対して警戒するように指示している。このような態度がとられた背景としては冷戦下の南北朝鮮の対立のなかで、この頃の労組・日教組等が北朝鮮に親和的であり、韓国の是正要求に批判的な部分があった点が理由として推測される。

当時の新聞のなかでこの是正要求を取り上げたものは少なく、一般の人々の関心も高くなかったと推察されるが、是正要求を扱った記事が存在する信濃毎日新聞でも、日本の教科書に見られる歴史認識に関しては「改善が望まれる」としながらも、「韓国の一方的な主張を取り入れよというのは無理な“注文”である」、「日本の立場も尊重してもらわなければかえって誤解を招くことになりかねない<sup>(8)</sup>」と韓国側による主張をそのまま教科書記述や教科書行政に受け入れることには異議を唱えている。80年代の教科書是正要求において、当時の政府与党による第二次教科書攻撃への批判や政府の記述訂正を認めない頑強な姿勢に対する不満とあいまって、世論や教科書関連団体から様々な批判が起こっていた<sup>(9)</sup> ことと比較すると、各団体の関心の低さに驚くほどである。

以上のように1976年の是正要求は韓国による批判の形態も、それに対する日本の反応も以降の是正要求に見られるような姿勢とは異なっており、韓国による初めての教科書批判という点を含めても非常に特徴的である。

## 2. 『日本社会科教科書検討意見書』の内容検討

では実際に1976年に行われた大韓教育联合会による教科書是正要求の歴史分野への要求はどのようなものだったのか。幸い『検討意見書』に大韓教育联合会が分析対象とした教科書一覧が掲載されているので、それを参考に当時発行された高校日本史・世界史、中学校社会（歴史的分野）の該当記述を中心に検討を加えた<sup>(10)</sup>。

### 2.1 「京城で攻撃した国連軍…」という記述について

ソウルの地名に関する記述について、韓国側は、日本のほとんどの教科書で「京城で攻撃した国連軍…」、「京城を占領した国連軍…」という教科書記述が存在するとし、京城という地名が1910～1945

に使用された一時的な呼称であり、45年以降はソウルと変更されているのに、依然として京城と表記している点は遺憾に堪えない、と主張している。

先に述べたとおり歴史分野に関しては該当箇所が明示されておらず、改善希望文もないため、どの教科書のどの頁であるかが特定しにくい、「国連軍」という記述からおそらく朝鮮戦争に関する記述で未だに「京城」という地名を用いているという点に関する批判であると思われる<sup>(11)</sup>。

以上の要求に対して、日本の歴史教科書の「朝鮮戦争」の記述における地名を見てみると、まず「朝鮮戦争」の項目で地名を記載している教科書は韓国側が検討した36点のうちわずか6点のみ<sup>(12)</sup>で、日本書籍『中学社会 歴史的分野』、教育出版『標準中学社会』が「ソウル」、学校図書『中学校社会』が「<sup>ソウル</sup>京城」、同『高等学校日本史』が「ソウル（京城）」、三省堂『世界史』が「…ソウルを占領した」、第一学習社『世界史』が「京城」という記述になっている。韓国側が指摘する「京城で攻撃した国連軍」などの記述はほとんどの教科書どころか1点にも見られず、地名自体も1点以外はふりがなも含めて「ソウル」という地名が用いられている。このことから「京城」の地名に関する要求は、韓国側の抗議が何を根拠として行われたものかははっきりしないが全くの誤解であると判断できる。

ただし、秀吉の朝鮮出兵の項では、「京城」としているものが日本史教科書13点中11点あり<sup>(13)</sup>、壬午事変の項では13点中7点が「京城」の地名を表記している<sup>(14)</sup>。韓国側の要求を1910～45年の日本統治期以外の地名で「京城」という地名を用いているという要求であると拡大解釈すれば、これに合致する部分が全くないとは言えない。ちなみに現在の山川出版『詳説日本史』では、京城の地名が用いられているのは日本の統治期のみになっており、具体的な批判内容に齟齬はあるものの「京城の地名は日本統治期に限るべきである」とする韓国側の主張の大枠は加味された記述に変化している。

## 2.2 豊臣秀吉による朝鮮出兵の記述について

豊臣秀吉による朝鮮出兵の記述に関して韓国は、その原因について、「明との国交と貿易再開のために、朝鮮にその斡旋や借道を要請したところ、朝鮮が応じなかったので戦をおこした」という記述（韓国側は「ほとんどの教科書」に見られるとしている）を「皮相な見方」とし、朝鮮出兵の真の原因を、秀吉の征服感と国内大名の不平を海外にそらすためであるとして、その旨の記述を要請している。また朝鮮出兵の結末については、ほとんどの教科書が記述する「明の救援と秀吉の死亡によって朝鮮王国は危機をまぬがれた」という記述だけでなく、「戦争を終結させたのはまさしく朝鮮民族であった」として李舜臣水軍の活躍や義兵のゲリラ活動、官軍の再組織と南下などによって日本軍の敗色が濃くなった点を記述することを改善希望点としてあげている。これに対し朝鮮出兵を取り上げた教科書の記述をまとめたものが以下の表1である。

まず朝鮮出兵の原因については、中学社会科教科書8点すべて、高校日本史教科書11点すべてが、韓国側が批判した「借道入明論」を記述しており、国内不安を海外にそらす旨の記述をしている教科書は全く存在しない。

朝鮮出兵の原因論についてはここでは詳しく触れることはできないが、76年の是正要求と比較的



表1 「朝鮮出兵」に関する記述

教科書名	記述（秀吉の朝鮮出兵理由）	記述（朝鮮出兵終結理由）
【中学校社会】		
日 書 『中学社会』	「さらに中国（明）を征服しようと考え、軍隊の通行を認めるよう朝鮮に申し入れた。これに対して朝鮮は明に従っていた関係もあって回答をよこさなかったが、…」	やがて朝鮮義勇軍（人民軍）の反抗が各地でおこり、水軍の力も強くなったうえに、明の援軍も朝鮮にきたので進撃はむずかしくなった。…朝鮮・明の連合軍に悩まされている時に、秀吉が遺言して死んだので、全軍が帰国した。
東 書 『新しい社会』	国内の統一だけで満足せずに、明にも進出しようと考えた。そしてその道すじにあたる朝鮮に、2度にわたって大軍を送り…	しかし2度目の戦いは不利になり、そのうえ、秀吉が病死したので、兵をひきあげた。
大 書 『中学社会』	全国統一だけで満足しないで、大陸の明を征服しようとして、朝鮮に軍隊の通行を申し入れた。しかし、朝鮮はこれをことわったので…	明の援助を受けた朝鮮軍と、朝鮮民衆の強い抵抗にあって…2度にわたる出兵も失敗におわり、秀吉の病死とともにむなしく兵を引きあげた。
中 教 『日本の歩みと世界』	明の征服をくわでて、その案内役を朝鮮に命じたが、朝鮮は、これに応じなかった。	朝鮮の民衆の反抗もあり、…秀吉の死を機会に兵を引きあげた。
教 出 『標準中学社会』	その勢いによって明を従わせようとし、朝鮮にそのなかだちを要求した。しかし、朝鮮が応じなかったのだ…	明が朝鮮を助け、朝鮮の民衆もはげしく抵抗したため、戦いはゆきづまった。まもなく秀吉が死んだので全軍はひきあげた。
学 図 『中学校社会』	明との貿易を復活しようとしたが成功せず、朝鮮もそのとりつぎに応じなかった。	朝鮮出兵にたいし、各地で朝鮮の民衆がたちあがって日本軍にはげしく抵抗した。まもなく秀吉が死ぬと、その遺言によって諸大名は朝鮮から兵をひきあげた。
清 水 『日本の歴史と世界』	明との国交の開始の取りつぎを朝鮮に求めた。しかし、朝鮮がこれをことわったために…	この戦争が終わらないうちに、秀吉が病死したので、諸大名は兵をひきあげて…
帝 国 『中学社会科』	明とも有利な立場で貿易をひらこうとして、朝鮮に仲だちを求めたが、朝鮮が断ったので…	この戦いは秀吉が死ぬ1598年（慶長3）まで続いた。
【高校日本史】		
東 書 『日本史』	明とも貿易再開を望んだが、朝鮮がその仲介を拒絶すると…	文禄：諸将の不和・海軍の劣勢に加えて明軍の参加をえた朝鮮軍や朝鮮民衆の抵抗などのため戦いは進展せず… 慶長：翌年秀吉の死去のために撤退した。
実 教 『日本史』	秀吉は明とも正式な国交を開こうとした。彼らはまず朝鮮に入貢を求めたが、交渉が不調におわたったため…	文禄：戦いがながびくにつれて、朝鮮の民衆の抵抗も高まり、戦局は思うようにはかどらず… 慶長：将兵の士気はふるわず、たまたま翌年秀吉が病死したために…
学 図 『高等学校日本史』	明とは貿易を再開しようとして、朝鮮にその仲介をすることを要求した。朝鮮がこの要求を拒否すると…	文禄：日本軍は水軍の劣勢と、明の援軍や各地で蜂起した朝鮮民衆の抵抗によってきびしい兵糧難におちいった。 慶長：戦局は日本に不利であったうえ、まもなく秀吉が病死したため…
三 省 『新日本史』	日明貿易を再開しようとして、まず朝鮮の入貢を求めたが、朝鮮がこれに応じなかったのだので、明を討とうとして道を朝鮮に求めた…	文禄：明の援軍に敗れて、京城（現在のソウル）に退いた。海上では李舜臣ひきいる朝鮮の水軍がつねに優勢を占め… 慶長：日本軍の作戦も活発に進まず、翌年秀吉が死んだのち
三 省 『日本史』	明との正式な貿易を復活しようとして、まず対馬の宗氏を介して朝鮮の入貢を求めたが、朝鮮に応じなかったこともあって…	文禄：各地に朝鮮の人民が蜂起し、明の援軍も加わり、また日本軍が弱体であったこともあってしだいに戦局は不利となった。 慶長：明軍の朝鮮に対する援助も強力で…秀吉が病死するにおよんで…撤兵した
清 水 『日本史』	さらに明に対しては国交と貿易を強く希望し、朝鮮に仲介を求めたが、朝鮮は応じなかった。そこで秀吉は…	1598年（慶長3）秀吉は病死し、遺命によって兵をひきあげた。

教科書名	記述（秀吉の朝鮮出兵理由）	記述（朝鮮出兵終結理由）
【高校日本史】		
帝国 『高等学校新日本史』	また倭寇を禁じて、明に貿易の復活を求め朝鮮に入貢を促した。しかし明も朝鮮もこれに応じなかったので…	文禄：明軍におされて 慶長：優勢な朝鮮水軍と明の援軍および朝鮮民衆の組織的抵抗のため、戦局は日本に不利となり、翌年秀吉の死によって…
帝国 『高等日本史』	しだいに専制的、侵略的な性格をあらわしていった…秀吉は明との貿易の復活を求めていたが、明に従属していた朝鮮に対する入貢の要求が拒否されると、明征伐の方針をかため…	文禄：朝鮮民衆の組織的抵抗と明の援軍のために苦戦を重ね 慶長：秀吉が伏見城で病死したので、朝鮮派遣の軍はこれを機に帰国した。
山川 『詳説日本史』	明との貿易の復活をはかり、1587（天正15）年、まず対馬の宗氏に命じて朝鮮国王の入貢をもとめたが、中国にたいしてつねに従属関係を取っていた朝鮮が応ずるわけがなかったのだ	文禄：朝鮮義民軍の抵抗、日本水軍の劣勢、明の援軍などのために戦局は進展せず… 慶長：翌年に秀吉が病死したため、むなしく撤退した。
山川 『標準日本史』	朝鮮国王の入貢を求めたが、朝鮮がこれに応じなかったため…	文禄：義民軍の抵抗、日本水軍の劣勢、明の援軍などのために戦局は進展せず… 慶長：翌年、秀吉が病死したために全軍撤兵し…
山川 『要説日本史』	秀吉はさらに対明貿易の復活をもとめて、まず朝鮮の来貢を要求した。しかし、朝鮮がこれにしたがわなかったのだ…	朝鮮軍・明軍のはげしい抵抗にあつて日本軍がなやんでいるうちに、1598（慶長3）年、秀吉が病死したため、全軍はむなしくひきあげた。
自由 『精髄日本史』	また朝鮮にも入貢を要求し、朝鮮を介して明とも貿易を再開しようとしたが、希望のようにならなかったのだ…	文禄：明軍の来援や朝鮮義兵のゲリラ戦になやまされ 慶長：戦況がはかばかしく進まぬうちに秀吉が死んだため
自由 『新日本史』	明の征伐を名目として15万の大軍を朝鮮に送った。	文禄：明軍の来援や朝鮮の義兵の活動になやまされて戦いはしだいに不利となり 慶長：秀吉の病死によって日本軍は撤退した。

近い時期に出された『歴史地理教育』では朝鮮出兵の原因として、辻善之助らの「日明勘合貿易復興説」や池内宏の「秀吉の功名心による海外征服説」、中村栄孝の「領土拡張説」、鈴木良一の「秀吉の専制的性格に由來說」などの諸説が紹介されており<sup>(15)</sup>、当時の研究動向はこれとあまり違いはないものと思われる<sup>(16)</sup>。これを見ると、日本の教科書は現在に至るまで辻説を一貫して採用しているといえる。それに対し一方の韓国側では一貫してこのような「借道入明論」を事実を糊塗するものであると批判しており<sup>(17)</sup>、最近の韓国の高等国史教科書でも「豊臣は国内政権安定のために、不平勢力の関心を外に集めると同時に自らの征服欲を満足させるために朝鮮と明に対する侵略を準備した<sup>(18)</sup>」と76年の主張とほぼ同様の内容が記述されている。この点に関しては当時にも東京書籍『新しい社会』や大阪書籍『中学社会』のように秀吉の征服欲を満足させるという説を取り入れた教科書記述も存在しているものの、どの説を通説として採用するか、という教科書執筆者の裁量に任される部分が大きく、「ほとんどの教科書」で記述される「借道入明論」への韓国側の是正要求は根拠があるものであるとはいえ、現在に至るまで教科書記述にほぼ変化はない。現行の山川出版『詳説日本史』でも、この記述に関しては近年の歴史学研究成果をふまえ、「豊臣秀吉による日本型華夷秩序実現」という記述が加筆されているものの、ほとんど変化はない<sup>(19)</sup>。

次に朝鮮出兵の結末については、表1を見ると中学社会科の教科書では、8点中5点が「朝鮮義勇軍（人民軍）」、「朝鮮の民衆」という形で、半数以上の教科書が朝鮮民衆による抵抗の存在について

触れていることがわかる。韓国側が主張するように「ほとんどの教科書」で「朝鮮民族」の存在が描かれていないとはいえない。むしろ中学教科書は記述の絶対量が少ないという点を加味するとこれらの記述は評価できるのではないだろうか。

高校日本史の教科書には「文禄・慶長の役」のようにまとめて記述しているものと、「文禄の役」「慶長の役」のように分けて記述しているものが存在する。「文禄・慶長の役」としているものは清水書院の『日本史』と山川出版社の『要説日本史』であるが、清水書院は朝鮮出兵の記述自体が少なく、「秀吉は病死し、遺命によって兵をひきあげた」という記述になっており、明軍の救援の存在すら書かれていない。一方の『要説日本史』は「朝鮮軍・明軍のはげしい抵抗にあつて日本軍がなやんでいくうちに…秀吉が病死したため」という形で、記述が少ないながらも朝鮮軍の存在には触れているが、義兵や朝鮮水軍の存在には触れておらず、この2点は韓国側の批判に該当する記述といえるであろう。

残りの11点の高校日本史教科書は文禄・慶長両役を分けて記述しているが、慶長の役については11点中5点が、戦況の不利に加え秀吉の死がきっかけとなったこと、11点中6点が「秀吉の死」のみを撤退理由としてあげている。このうち戦況の不利が何の影響によるものかを明示しているのは三省堂『日本史』の「明軍の援助」、帝国書院『高等学校新日本史』の「優勢な朝鮮水軍と明の援軍および朝鮮民衆の組織的抵抗」の2点であった。このように慶長の役のみでみると、韓国側の主張に合致するかにみえる。しかし、文禄の役の終結理由についてみると、11点中三省堂『新日本史』を除いた10点が「明軍の来援」「日本水軍の劣勢」などとともに「朝鮮義兵の活動」あるいは「朝鮮民衆の抵抗」によって戦況が不利になった点を記述している<sup>(20)</sup>。終結理由に朝鮮義兵・民衆の存在を挙げていない三省堂『新日本史』についても、日本の教科書の中で唯一「文禄・慶長の両役とも、海上では李舜臣のひきいる朝鮮の水軍がつねに優勢を占め…」という形で李舜臣を登場させており、朝鮮出兵の記述全体において朝鮮人民あるいは朝鮮水軍による抵抗に関する記述がない高校日本史教科書は全く存在しないといってよい。

以上の事から、朝鮮出兵の記述では、その出兵理由については韓国側の是正要求に該当する記述内容がほぼ確認された一方で、その終結・結果については、「明の救援と秀吉の死亡によって朝鮮王国は危機をまぬがれた」として朝鮮民衆・水軍の存在に触れていない教科書は朝鮮出兵自体の記述が少ない数点のみであり、大多数の教科書では、韓国側の主張する「戦争を終結させたのはまさしく朝鮮民族」という記述まではいかないが、改善希望点に掲げられているような内容が既に当該教科書記述に現れていることがわかった。

### 2.3 江華島事件（雲楊号事件）の記述について

江華島事件については、「雲楊号が測量中に朝鮮軍に砲撃され交戦し…」という記述について、ほとんどの教科書がそう記述していたうえで、このような記述は「雲楊号事件の責任が朝鮮にあり、それがために条約を調印したと誤らせる結果になる」とし、日本の「計画的な挑発行為」であるという事実を記述することを要請している。これも日本の教科書にどのように書かれているかを表2

表2 江華島事件の記述

教科書名	記述（※は脚注）	教科書名	記述（※は脚注）
【中学校社会】		【高校日本史】	
日 書 『中学社会』	※日本の軍艦が朝鮮沿岸で演習や測量をして、朝鮮軍に砲撃された事件。	帝 国 『高等日本史』	※江華島事件とは、朝鮮の江華島付近で日本軍艦が朝鮮側から砲撃された事件である。朝鮮は日本の武力におさえられて釜山ほか3港を開き…
東 書 『新しい社会』	※日本の軍艦が朝鮮沿岸で演習や測量を行ったため、朝鮮の江華島の砲台から砲撃された事件。	山 川 『詳説日本史』	1875（明治8）年、朝鮮の江華島付近で示威行動をおこなっていた日本の軍艦が砲撃される江華島事件がおこったのを機会に、…
大 書 『中学社会』	朝鮮の江華島に接近した日本軍艦が砲台から攻撃された。	山 川 『標準日本史』	※江華島事件は、朝鮮の江華島付近で示威運動をおこなっていた日本の軍艦が砲撃された事件。
中 教 『日本の歩みと世界』	朝鮮に武力で開国をせま（江華島事件）	山 川 『要説日本史』	※江華島事件は、朝鮮の江華島付近で示威運動をおこなっていた日本の軍艦が砲撃を受けた事件。
教 出 『標準中学社会』	※日本の軍艦が朝鮮沿岸で測量を行ったため、江華島砲台の守備隊に砲撃された事件。	自 由 『精髄日本史』	※朝鮮の江華島に接近した日本の軍艦が同島の砲台から砲撃を受けて交戦した事件。
学 図 『中学校社会』	※朝鮮の沿岸で測量を強行していた日本の軍艦が、朝鮮の砲台から攻撃される事件がおこり…	自 由 『新日本史』	※朝鮮の江華島に接近した日本の軍艦が、同島の砲台から砲撃を受けて交戦した事件。
【高校日本史】		【高校世界史】	
東 書 『日本史』	朝鮮の領海に侵入して測量中の日本軍艦が江華島の朝鮮砲台と砲撃を交えた（江華島事件）。	三 省 『新世界史』	江華島近辺に侵入して測量中の日本の軍艦が砲撃されたので交戦した。
実 教 『日本史』	首都京城（「ソウル」）のふりがなあり（引用者注）付近の江華島で測量を強行していた日本軍艦が砲撃を受けた事件をきっかけに交渉再開を迫り、…	三 省 『世界史』	江華島近辺に侵入した日本の軍艦が砲撃される事件がおこり…
学 図 『高等学校日本史』	朝鮮を開国させるために示威運動を行っていた日本の軍艦が、江華島砲台に接近して発砲され、戦火を交えた（江華島事件）。	帝 国 『高等世界史』	※日本が軍艦を派遣して江華島付近を測量させ、朝鮮の砲台から砲撃を受けて交戦した事件。
三 省 『新日本史』	※1875年9月、日本軍艦が江華島で朝鮮の領海を侵し、そのため砲撃を受け、日本側も応戦したという事件。	秀 英 『世界史』	日本の軍艦が江華島沖で領海を侵犯したとして、朝鮮から砲撃された事件。
三 省 『日本史』	※日本の軍艦が薪水を求めて朝鮮の江華島に接近し、島の守備兵と衝突した事件。	山 川 『詳説世界史』	※江華島付近で示威運動をしていた日本軍艦が砲撃された事件を機に…（日朝修好条規の脚注）
清 水 『日本史』	※1875年（明治8）、朝鮮の江華島近海で日本の軍艦が示威測量中、江華島守備兵が発砲したのでこれと交戦し、同島を占領した事件。	山 川 『世界の歴史』	※江華島付近でおきた日本軍艦への砲撃事件を機に、（日朝修好条規の脚注）
帝 国 『高等学校新日本史』	※江華島事件とは、朝鮮の江華島付近で日本軍艦が朝鮮側から砲撃された事件である。朝鮮は日本の武力におさえられて釜山ほか2港を開き…	学 図 『高等学校世界史』	日本軍艦が測量のために江華島水域に入り、朝鮮側から砲撃されて武力衝突となった。
		実 教 『世界史』	朝鮮に開国を迫っていた日本は、1875年、測量を理由に軍艦雲揚号を領海深く進入させたため、江華島砲台はこれに発砲した。雲揚号はそれに応戦して多くの損害を与えた。

としてまとめた。

江華島事件については中学教科書は8点中6点、高校日本史教科書は13点すべて、世界史教科書は15点中8点で記述が見られる。まず中学社会教科書についてみると、学校図書1点のみが「測量を強行」という形で記述するのみで、それ以外は全て韓国側が指摘するように、日本の示威的、挑発的な行為について記述しておらず、中には中教出版のように日本軍艦による測量の事実すら言及していないものも存在するなど非常に不十分な内容である。

次に高校教科書を見ると、日本史・世界史を合わせて、雲楊号の行動について「示威運動」あるいは「示威測量」、「示威行動」と記述している教科書は6点、「朝鮮の領海（江華島近辺）に侵入」「領海を侵し」「領海を侵犯」としている教科書が5点、「領海深く進入」「測量を強行」がそれぞれ1点ずつ存在し、全体としては江華島事件を取り上げている21点の教科書のうち13点が日本側の行動を単に測量とするものではなく、「示威」あるいは「侵入」という形で記述していることがわかる。中には「朝鮮に開国を迫っていた日本は、1875年、測量を理由に軍艦雲楊号を領海深く進入させたため、江華島砲台はこれに発砲した。雲楊号はそれに応戦して多くの損害を与えた」という雲楊号の与えた損害にまで記述が及ぶ内容になっている実教出版『世界史』などの教科書も存在する<sup>(21)</sup>。高校教科書においては、江華島事件の原因として、開国交渉の契機をつくるために軍艦による示威運動を起こしたという事件の実態、日本側に責任があると明確に読み取れる詳しい記述は少なく、また韓国側の要請する「計画的」ということが読み取れる記述が存在しない点では韓国側の主張に妥当性が見受けられるものの、「挑発的」という内容については半数以上の教科書ではほぼ反映されているといえる。

以上のように、江華島事件の記述については、記述の少ない中学社会科教科書では韓国側の指摘するような誤解を生む記述の教科書が多い一方で、高校教科書においては、韓国側の主張する「計画的な」ということが明確に読み取れる記述こそ存在しないものの、「挑発的」という旨の記述内容は、韓国側が検討対象とした教科書に既に記述されているものが多く、「単なる測量」と読み取れる記述のほうかむしろ少数派であるということが出来る<sup>(22)</sup>。

## おわりに ～その後の歴史教科書記述の変化

韓国からの是正要求の内容について検討してきたが、是正要求がなされて以降の日本の教科書にどのような変化が見られたかについて簡単にではあるが触れておく。

第2章で述べたように韓国側の是正要求内容自体がほぼ根拠が薄弱なもの、該当記述が是正要求対象教科書に既に記述されているものであることが明らかであり、当時の日本の各教科書に与えた影響はあまり大きなものではないことが伺える。

是正要求3点について各教科書の記述内容の変化について見ていくと、まず「京城」の地名については、朝鮮戦争の項だけでなく様々な場面での地名を検討したが、1977年度改訂検定教科書では変化は見られない。ただし80年度検定教科書になると、秀吉の朝鮮出兵や壬午事変、日清戦争の記述や地図上の地名で「京城」から「漢城」に変更する教科書が徐々に増えていることがわかった。

秀吉の朝鮮出兵の項では、77年度改訂検定教科書では、出兵の原因については依然として変化がないものの、撤退の理由については中学社会でこれまで朝鮮義兵・民衆の抵抗の存在に触れていなかった帝国書院、東京書籍が新たに扱うようになり、中学社会8社中清水書院以外の7社が義兵・民衆抵抗に触れるようになった<sup>(23)</sup>ほか、中学社会で教育出版が新たに李舜臣を扱うようになり、80年度検定教科書ではさらに中学で大阪書籍、高校日本史で実教出版が李舜臣を取り上げるようになるなど韓国側の希望が一部入れられた形になっている。

中学社会での記述に不十分さが目立った江華島事件では、77年度検定の結果、日本軍艦の存在にすら触れていなかった中教出版が「日本の軍艦が朝鮮の沿岸で演習や測量を行ったため砲撃を受けた事件」と日本側の行為によって起こった事件であることが読み取れるような記述に変更したほか、日本書籍を除く7社の教科書が「示威（東書）」「朝鮮の沿岸へ侵入（学図）」といったように日本側の挑発的な行動が読み取れる記述や別にコラムを設けるように変化した。高校日本史でもこれまでの教科書に加え、自由書房発行の2点の教科書が「日本の軍艦が、朝鮮の江華島付近の領海を侵して測量を行い、また飲料水を求めて上陸しようとしたので、同島の砲台から砲撃を受けて交戦した事件」として日本の挑発的行為に触れるようになった。

このように韓国側からの要求内容に問題はあるものの、妥当であると判断された箇所についてはその要求が一部ではあるが教科書記述に反映されていることがわかる。

国際的な問題としての教科書問題を考えるうえで、他国からの是正要求内容を慎重に検討し、その上で教科書記述に反映させていく姿勢はわが国の教育内容を信頼性の高いものとするうえで重要であるし、アジア諸国との友好を表面上のものではなく真に深める上で必要である。今回、1976年の韓国からの是正要求内容を検討した結果、歴史分野に関しては、韓国側の主張に妥当性があるものは「秀吉の朝鮮出兵の理由」と記述の少ない中学校社会科での「江華島事件」のみであり、その他の要求は当該教科書のほとんどに韓国側の要請する記述が既に現れているものや、「京城」の地名に至っては、該当する教科書記述が全くないという非常に根拠の不明瞭な批判であることがわかった。特に問題とすべきなのは、韓国側がこの要求を「ほとんどの教科書」に該当する記述があるとして批判をしている点である。秀吉の朝鮮出兵の理由、中学社会科教科書の江華島事件を除いて「ほとんどの教科書」に問題があるどころか半数以上の教科書で韓国側が希望する内容が記述に既に反映されていることが明らかである（もちろん記述の不十分さを指摘すればとりとめもないことではあるが）。このような根拠の薄い是正要求が行われたことは、それを検討した当時の日本の関係機関も当惑したであろうし、これからの両国の関係においても良いものにはならないであろう。日本の教科書会社の対応はこのような韓国側の要求に対しても、妥当な部分に関しては是正をしようとしている姿がうかがえるものであった。特に京城の地名は、韓国側の要求に対し、その要求の抱える問題性を広く解釈をして、日韓併合以前の「京城」という地名が「漢城」と改善されていく教科書も徐々に現れてくるようになっていた。

韓国からの是正要求はこの76年のもの以外にも多数存在するが、それらの要求について慎重に内容を当時の教科書記述と照らし合わせて妥当であるか検討したものは少ない。82年の教科書問題にも私の調べた限りでは「侵略が進出に書き換えられたのは誤報である」と従来から一部で主張されているような内容以外にも多くの点で韓国側の抗議内容と実際の記述・検定内容とは齟齬が見られる。とかく自国中心的になりやすい教科書論争においては、それへの懸念から相手側の批判の齟齬を採するという視点は避けられる傾向にあるのかもしれない。しかし、外交問題にまで発展しかねない要求であるからこそ、まずその内容についてきちんと分析することが第一であるはずである（もちろん要求を出す側である韓国にその姿勢がまず求められるのはいうまでもない）。そうでなければ両国の関係がいらいな問題で悪化するだけでなく、執筆者が苦心して改訂した教科書記述の変化という成果についても正しく捉えることが出来なくなるのである。

注(1) 旗田巍『朝鮮と日本人』勁草書房、1983。

(2) 同会は現在の「大韓教員団体総連合会」の前進で、1949年に創設され、一般的な教育制度について政府と交渉する団体である。組合員数は様々な学校形態のなかで約20万人にのぼる。

(3) 大韓教育聯合会編『日本社会科教科書検討意見書』龍溪書舎、1976。

(4) 「検討意見書」にある地理や公民に関する要求内容はおよそ次のような内容である。

・地名等名称に関するもの

例)「朝鮮」→「韓国」,「朝鮮民族」→「朝鮮半島」「北朝鮮」「南朝鮮」→「韓民族」「韓半島」「北韓」「南韓」,「北朝鮮軍」→「北韓共産軍」,「対馬海峡」→「大韓海峡」,「対馬海流」→「大韓海流」に書きかえよ。

・資料の正確性に伴うもの

例)「小農が多く灌漑施設や機械化もおくれ、農民のくらしはきびしい」を「農業生産の増大や農民所得の増大のため、灌漑設備、耕地整理、種子更新、農業機械化などがよく進んでいるので、農民の生活は安定し、向上している」に書きかえよ。

・南北朝鮮の対立を反映するもの

例)「南朝鮮の産業は農業が中心になっているのに対し、北朝鮮では工業がさかんである」を「南韓の産業は農業と工業が中心になっているのに対し、北韓でも鉱工業が行われている」に、「その後、1961年に北朝鮮は、ソ連、中華人民共和国との間に友好協力相互援助条約を結び軍事協力の体制を強化した」を「南からの侵略に備えて北韓がソ連、中共と協定を結んでいるようにとれる」との理由で「その後、大韓民国はアメリカとの間に韓米相互防衛条約を結んで北韓の再侵略に備えている」にそれぞれ書きかえよ。

(5) 統計庁『韓国統計年鑑』各年版を参考にした。

(6) 1970年代の日本歴史教科書において日朝関係がどのように叙述されているかについては、金達寿他編『教科書に書かれた朝鮮』（講談社1979）、朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史をどう教えるか』（1976 龍溪書舎）を参照。

(7) 『東京新聞』1976年11月30日付。

(8) 『信濃毎日新聞』1976年11月30日付。

(9) 82年の教科書問題では、8月13日に社会科教科書執筆者懇談会が結成されて以降、同月15日に「教科書問題を考える市民のつどい」として大きな反対運動が起り、その後も種々の市民団体のほか、原水禁の準備委員会でも教科書問題に触れられるなどその運動は広範にわたり、9月15日には「改悪教科書の即時書きかえと現行教科書検定制度の抜本的見直しを求める各界人実行委員会」が結成され、教育関係者だけでなく、学生、平和団体、労働組合などの代表が実行委員会を結成、教科書の即時書きかえを求めるなど9月以降まで広範な運動が起こっている。また各教科書会社も教科書記述の訂正申請を前者が行うなどここでも広範な反



応が見られる。

- (10) 今回検討対象とした教科書は以下の通り（中学社会は昭和49年度改訂検定済，世界史は昭和47年度検定済，日本史教科書は昭和48年度検定済である。）

中学校 社会	日本書籍 『中学社会』	東京書籍 『新しい社会』	大阪書籍 『中学社会』	学校図書 『中学校社会』	中教出版 『日本の歩みと世界』
	清水書院『日本の歴史と世界』	教育出版『標準中学社会』	帝国書院『中学社会科』		
高校 世界史	東京書籍『世界史』	三省堂『新世界史』	三省堂『世界史』	学校図書『高等学校世界史』	山川出版社『詳説世界史』
	山川出版社『世界の歴史』	山川出版社『要説世界史』	山川出版社『標準世界史』	第一学習社『世界史』	実教出版『世界史』
	清水書院『世界史』	帝国書院『高等世界史』	帝国書院『高等学校新世界史』	中教出版『世界史』	秀英出版『世界史』
高校 日本史	東京書籍『日本史』	三省堂『新日本史』	三省堂『日本史』	学校図書『高等学校日本史』	山川出版社『詳説日本史』
	山川出版社『要説日本史』	山川出版社『標準日本史』	実教出版『日本史』	清水書院『日本史』	自由書房『精髓日本史』
	自由書房『新日本史』	帝国書院『高等日本史』	帝国書院『高等学校新日本史』		

- (11) 全時代に見られる「京城」という地名に対し疑義を述べた要求である可能性も否定はできないが，該当箇所以外に「ソウル」地名に関する要求が存在しない点や，80年の韓国による是正要求でも戦後日韓関係記述のみに同様の批判がなされている点からその可能性は低いと思われる。
- (12) このうち本文に記述しているのは三省堂『世界史』のみで，他の5点のうち4点は地図中の地名，1点は写真のキャプションである。
- (13) このうち「漢城（京城）」、「京城（今のソウル）」、「<sup>ソウル</sup>京城」と記述しているものが1社ずつあった。
- (14) このうち1社が「京城（現ソウル）」，3社が壬午事変を「京城の変」「京城事変」とゴチックで表記している。
- (15) 北島万次「豊臣秀吉の朝鮮侵略」『歴史地理教育』122号 歴史教育者協議会編，1966，pp. 7-8.
- (16) 秀吉の出兵理由については，近年行われた日韓歴史教科書シンポジウムでの討議をまとめた『日本と韓国の歴史共通教材をつくる視点』（梨の木舎2003）ではこの4点に加えて「領土層の領土への欲望を大陸に向け放出させたとする説（この説は1986年に初出）」が新たに紹介されている。
- (17) 1982年の教科書問題時に出された「日本教科書韓国関係わい曲内容」（『東亜日報』1982年8月5日付）には「当時の口実として打ち出した用語を使用して，内容を糊塗している」との批判があり，また鄭在貞は『韓国と日本 歴史教育の思想』（すずさわ書店，2005）のなかで「侵略の合理化，口実」と批判している。
- (18) 大槻健，君島和彦ほか『世界の教科書①新版 韓国の歴史』明石書店，2000。
- (19) 現行山川出版社『詳説日本史』の記述は以下の通り。「全国を統一した秀吉は，この情勢の中で，日本を東アジアの中心とする新しい国際秩序をつくることをこころざし，…秀吉は対馬の宗氏を通して，朝鮮に対し入貢と明へ出兵するための先導を求めた。朝鮮がこれを拒否すると，秀吉は肥前名護屋に本陣をきずき…」
- (20) 三省堂『新日本史』の文禄の役の撤退理由は「明の援軍に敗れて」という記述のみであった。
- (21) この記述については本文中の記述ではなく，江華島事件を描いた錦絵のキャプションである。
- (22) 現行の山川出版社『詳説日本史』における当該部分の記述は「日本の軍艦雲揚号が首都漢城近くの江華島で朝鮮を徴発した事件」となっており，日本の挑発的行為がより明確に読み取れる記述となっていることが確認できる。
- (23) 清水書院についても1980年検定の教科書では「朝鮮義勇軍」の存在に触れるようになり，出兵理由にも「諸大名の領土欲，商人の利欲」が理由の一つとして挙げられるようになる。